

令和2年度 さいたま市立片柳小学校 自己評価書

校長 萩原 哲哉 印

1 学校で設定した「令和2年度の目標」及び関係する「評価項目」について

- (1) 確かな学力を身に付け、学ぶ楽しさを実感させる授業
 - ・授業力の向上
 - ・児童の学習習慣の確立
 - ・読解力の向上
- (2) 人として生き生きと生きる礎の構築(心、からだ)
 - ・体力向上
 - ・いじめ、長欠対応
 - ・体験活動の重視
- (3) 人や地域に感謝する心情の涵養(自然にしみこむように育てること)
 - ・保護者との連携
 - ・地域との連携
 - ・地域への感謝と参画
- (4) 児童の可能性を伸ばす教師(「質問力」の向上)
 - ・キャリアステージの自覚
 - ・教師の「人間力」「社会性」の向上
 - ・働き方改革

2 評価結果について

- (1) 授業力の向上については、『よい授業』アンケートで4因子とも市の平均と同等か上回った(4因子平均の前年比+0.2P)。学校課題研修として、各自が深めたい教科・領域を選択して取り組む体制を整え、公開または研究授業を行った。その中で、新しく導入されたタブレットを活用した授業も積極的に行われた。家庭では宿題を中心に集中して学習する時間をもっているが、スタディ・エッセンスの利用は不十分であった(児童回答32%)。図書館まつり等の実践により不読率は0であったが、「本をよく読むようになった」という保護者回答は45%で、昨年度を3%下回った。
- (2) 新型コロナウイルスの感染症対策で運動(体育)の内容が制限されているが、「体育以外で体をよく動かしている」と回答した児童の割合は91%と高かった。いじめや長欠に関して、組織的な対応ができたことから、「いじめや不登校解消に向け、十分に取り組んでいる」と回答した保護者の割合が83%(前年比+9%)、「困ったとき先生に相談できる」と回答した児童の割合が82%(前年比+2%)であった。
- (3) 家庭との連携に関して、昨年度実施しなかった個人面談を保護者の要望から今年度実施し、すべての教職員が「家庭との連絡を適切に行った」と回答したが、「学校は、家庭や地域との連携を深める教育活動を行っている」と回答した保護者の割合は前年より3%下がった。これは、感染症対策で運動会等の行事ができなくなったことや時間外の電話の対応を制限したことが関係していると考えられる。
- (4) 教職員の時間外勤務時間の平均は前年比-17%だった。感染症対応の中十分とは言えなかったが、ノー残業デーの実施や時間外の電話対応の制限、会議の精選及び実施回数の見直し、時間の削減等で働き方改革を推進することができた。

3 次年度に向けた具体的な改善策について

感染症対策に追われ十分な取組ができなかったものを一つずつ実施していくこと、新しく学校に導入されたものを積極的に活用していくこと、WITH コロナの中でもできる最大限を考えることが次年度の課題と考える。

- 児童一人1台のタブレットの活用や教科担任制の研究を実際に実施しながら進め、質の高い授業を行っていく。
- 児童が本に親しむ機会をより一層工夫し、学校でも家庭でも読書をする時間を習慣化させていく。
- 学校行事の実施方法を見直すとともに、児童の活躍の場を十分に設定していく。
- 地域とのつながりがほとんどもてなかったのを、改めて関わりを持てる機会を設定していく。
- 教職員の多忙感の解消のため、業務の効率化について全職員でアイデアを出し合っていくことや、計画年休等が取りやすい体制を整えていく。